

# 虹の海の童話集

パッブルさまの大マホー

ぶん ウミニール・プラントン  
え プアマリナ&ほのか(3歳)

2000年1月



春はるになるとさくら公園こうえんからあたたかい風が吹きはじめ、この町の空も道路どうろもお家もビルディングも、みんなピンクの海うみの中にしずんだようになる。

町まちのみんなが「千本ざくら」と呼ぶこの公園のさくらの木、本当は百二十七本しかないんだけど、その中でも特別とくべつ大きくてきれいな木がこの町まちの名物めいぶつだ。

夏なつには長く伸びた枝で大きなかげを作って道行く人々の足を止め、秋にはたくさんはの赤い葉を落としてこどもたちをよるこぼせ、冬には白しろいお城しろとなって冷たい雪ゆきと風から他のさくらを

守まもっている。

町のどこからでも見えるこの大きな大きなさくらの木からぼくは生まれたんだ。

そう。ぼくはさくらの木のヨウセイ。

でもヨウセイっていうとフワフワで白や黄色や水色のドレスを着たかわいい女の子だとみんな思っているから、だれもぼくのことをそうだとは思わない。

でもこれっていいこともたくさんある。だってみんなぼくのことを人間だと信じてうたがっていないのさ。

「ほらほら、ケンちゃん。ちっちとじはん食べちゃいなさい。」

ほらね。この人もぼくのことを五才の男の子だと思っているんだ。

ぼくもこの人のことをママって呼んでいるんだけど、これはぼくがママのこともだと思わせるため。

なにしろ人間にヨウセイだっということがバレちゃったら、大さわぎになっちゃうからね。

でもなー。「タムラケンタ」なんてかっこわるい名前。

本当は「パップル・ペップル・クックル・ポッポ」ていうりっぱな名前があるんだ。

もちろんマホーだって使える。

「うん。魚さかなのホネがのどにささっちゃったよー。」

これは人間の世界せかいでのぼくのおねーちゃん。まったく小学校に行ってるっていうのに本当にお子ちゃまなんだから、そんなのほら、一、二のさん！

「あれ、なんか取れたみたい。」

だから言ったでしょ。ぼくはマホーが使えるのさ。

「ほれほれ、一人ともごはん食べるのにいつまでかかってんだ。さっさと食べな  
いとおいて行くぞ。」

そうそう、そしてこれがこの世界でのぼくのパパ。

ちよっと太りぎみだけどやさしいパパと、今日は日曜日だから映画えいがを見に行く  
んだ。

ぼくたちヨウセイの世界では月曜日でも火曜日でもいつでもお休みなのに、人  
間のパパってかわいそうなんだな。たまのお休みでもこどもの相手なんて、本当  
に同情りゆうじょうしちゃうよ。

「ねえねえパパ。映画館えいがかんにいったらタッキーさまも来てたりしないかなー。」

「うん。どづかな。今日は忙しいいそがいじゃないかな。」

タッキーってのは、おねーちゃんの好きなジャーニーズとかいうところのお兄  
ちゃんなんだ。

「あーあ。タッキーさまに会いたいなー。」

これはさすがにマホーでもなんともならない。

このパッブル・ペッブル・クックル・ピッピさまにもできないことがある。

あれっ。

パッブル・ペッブル・ピッピル・クックだったかな。まあ細かいことはどづで  
もいいや。

そうそう。ぼくはこの世界では五才の男の子になっているから、「よーちえん」なんてものに行っている。

でもこのこともたちにも困こまったもので、みんなこのえらいヨウセイのポップルさまを自分たちと同じよーちえんじだと思っているんだ。

先生だってそう。ぼくにむりやりおゆうぎなんてものをさせるんだ。

みんなで手をつないで同じところをグルグル回うたらされたり、下手くそな歌を毎日聞きかされたり。

まあでも、お絵えかきとか絵本の時間じかんだけはちょっと付き合あってやってもいいかな。少しぐらいならね。

なにしろ、ぼくたちヨウセイはみんなきれいなものが大好き。ゲーじゅつかつてやつね。

「ケンタクくん、今日は何のお絵かきしてるのかしら。」

「うん。公園こうえんのさくらの木さ。」

「ほんとだ。じょうずだね。」

この人がカホ先生。ぼくたちのクラスの先生で、やさしくてかわいくて、そう

だね、人間どもの中では、ぼくがママの次に好きな女の人かな。

もちろん先生もぼくのが大好き。ぼくだけにはわかるんだ。なにしろマホーが使えるからね。

「せんせー。ぼくの絵も見てよー。」

「はいはい、ちょっと待ってね。」

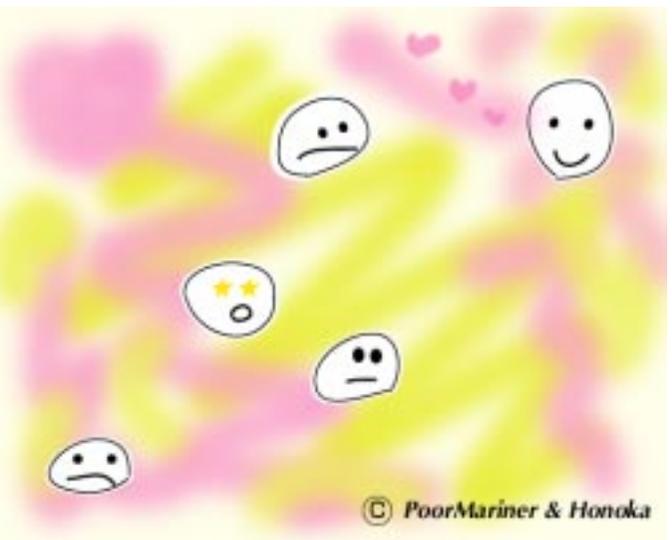
あれあれ、行いっちゃった。しょうがないな。

他のよーちえんじたちにはマホーなんて使えないから、あの人ひとがぼくのカホちゃんだってことがちつとも分わかっていないんだ。

まったく困こまったもんだね。

「あら、「ヨウジくんも公園のさくらの木をかいてるのね。」じょうずだわー。」

クスクス。「ヨウジのやつたらあんなにつれしそうな顔かおしているけど、おせじだってば。」



カホ先生も人が悪いなあ。そんなでんしんばしらみたいなの、ぼくのママなわけないじゃないか。

ああ、そうそう。ぼくの本当のママがあのださくらの木だってことはもちろんみんなにはないしょのことだよ。

その日のおひるねの時、ぼくは、ちょっとだけみんなにカホちゃんのことを教えてあげようかと思った。

先生の口からみんなに伝えてあげるのも親切しんせつかもしれないね。  
なぜかって言うと、ミキちゃんが変なことを言い出したからなんだ。

「あのね、カホ先生ってさ、もつすべこのよつちえんをやめちゃうんだって。」  
「ええ、べつして。」

って言うより、もうよーちえんじの相手をしているのがいやになったんだね。きつじ。

「あのね、カホ先生って、夏なつになったらけっこんするんだって。うちのママがそう言ってたもん。」

これはさすがにみんなびっくり。そんなことちっとも知らなかった。ぼくだって同じさ。もしも本当だとしたら、うっん。これは大変だ。

きつとカホ先生のお家はびんぼうで、泣く泣く好きでもない男の人とけっこんするにちがいない。

いや、もしかすると先生のママは本当のママじゃなくて、とてもいじわるなのかも。

でもかなしいことに、ぼくには何にもできない。

ぼくたちヨウセイはマホーを人の心に使ったりしちやだめなんだ。

いくらヨウセイでも、人の心を変えたり、死んだ人間を生き返らせたりすることだけはしちやいけない約束やくそくになっている。

もしそれをやぶつたら、ぼくたちヨウセイは、神さまのおいかりで虫や動物じゅうぶつに変えられてしまうんだ。

何に変えられてしまうのかは、その時の神さまの気分しだい。チヨウチヨのときもあれば、トンボのときもある。アリンコにされてもしたらきつとこのよーちえんじたちに、アツというまにふみつぶされてしまう。

なんととってもこわいのは、カエルになつちやうこと。ママもカホ先生もカエルが大きらいだから、そうならもつ二度と、会うことさえできない。

いくらママつて呼よんでも、先生つて呼んでも、きつとママたちには「ケロケロ」にしか聞こえなくて、「キヤー」とか言つて、逃げてつちやうんだろつな。

ここはしかたない。男らしくカホ先生のことにはあきらめよう。せめて今は好きじゃないその男の人がやさしい人で、カホ先生のことを大事にしてくれることだ

けをお願いねがするしかない。

「でもカホ先生、かわいそうだね。」

ぼくがそう言つと、男の子たちはみんなうなずいた。

ところが、女の子たちはみんな首びくをかしげた。

「だって、すてきなおよめさんになるのよ。きつとつれしいはずじゃない。」

まったく、人間の女の子つてこれだもん。

「だってさ、だってカホ先生は本当はぼくのことが好きだったんだよ。」

ついにぼくとカホちゃんのことを言つちやった。すると他の男の子たちが口々にさわぎだした。

「何言つてるのさ。カホ先生はぼくのことが好きなんだぜ。」

「ちがうよ。カホ先生はぼくのことを好きなんだよ。」

ほんとにね、みんなマホーが使えないからしょうがないんだけど、ものすつていかにちがいだよ。



そんなある日、事件<sup>じげん</sup>がおこったんだ。  
なんと、この町の人みんなが大切にしているあの公園<sup>こうえん</sup>のさくらが全部<sup>ぜんぶ</sup>切りたおされてしまうかもしれないというんだ。



もちろん、そうになったら、ぼくの本当のママも死んじやう。

「ごんどの花見が最後<sup>さいご</sup>になるのか。」

「せめて半分だけでもさくらを残<sup>のこ</sup>してくれないかな。」

大人たちはこんなことを言い合っているけど、じょうだんじやない。もしもそんなおそろしいことが本当だったら、ぼくだって生きては行けないじやないか。

しかも、木を切る理由<sup>りゆう</sup>っていうのが、とてもつまらないこと。さくらの落ち葉<sup>おちば</sup>が川にたまると洪水<sup>こうすい</sup>の原因<sup>げんいん</sup>になるからだっていうんだ。

そんなの一度だっておこったことがないのに。落ち葉<sup>おちば</sup>だって、今までは、みんなでおそうじしてたじやないか。

「神さま、これでもぼくは人間の心にマホーを使ってはいけないの。」

でも神さまは何も答えてはくれない。ぼくの本当のママを助けるためであつても、それどころか自分を助けるためであつても、ぼくたちは、人の心をマホーであやつることはできないんだ。

ママもパパも、カホ先生<sup>せんせい</sup>だって、エンチヨー先生<sup>せんせい</sup>だって、みんなこのさくらの木の切りたおしには顔を真<sup>ま</sup>つ赤<sup>あか</sup>にして怒<sup>おこ</sup>った。

町の人もみんな怒<sup>おこ</sup>ったし、だれ一人として賛成<sup>さんせい</sup>する人はいなかった。

テレビも来<sup>き</sup>たし、しんぶんの人も来<sup>き</sup>たし、ダイジンとかいうえらい人もやつてきた。

まあでも、これはぼくに言<sup>い</sup>わせれば、ちょっとだけやって来て帰<sup>かえ</sup>っていったつてかんじだったけどね。

なんて言うのかな、つまりたくさんの方がさくらの木を切ることに反対<sup>はんたい</sup>したんだけど、人間の世界<sup>せかい</sup>では、ヤクシヨとかいうところで決<sup>き</sup>まったことは変<sup>か</sup>えられない約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>になつていてみたいなんだ。

ヨウセイの世界ではそんな変な約束なんてだれもしないんだけど。

でも、悪いことが重なるのも人間たちの約束みたいで、ぼくのこの世界でのかぞくに悲しいことがおこった。

そう。さくらを切ることに大反対していたパパが、人間の男の人の中ではぼくが一番大好きなパパが、さくらの木から落ちて死んじゃった。

しかもパパが落ちた木は、ぼくの本当のママだったんだ。

パパは、その大きな大きなぼくのママにのぼって、切りたおし反対のカンバンをかけようとしていたんだけど、ママの手がちょっと太りぎみのパパをささえられなくて折れちゃったんだ。

しらせを聞いたママとおねーちゃんとぼくが公園こうえんについたときには、パパは目をつぶって横になっていた。

もう目をあけることもない。もうその口から言葉ことばが出てくることもない。もうそのうででばくやおねーちゃんを持ち上げてくれることもない。

そう思うと、ぼくの目からなみだがあふれだしてきた。ぼくはヨウセイなのに。この男の人は本当のパパじゃないのに。

ふと横を見るとおねーちゃんも泣いている。そりゃそうだね。おねーちゃんにとっては本当のパパだもん。

でもママは泣いていなかった。  
口を横よこにギュッと細くして、歯はを食いしばっているのが分かる。

きっとパパを一番好きなのはママで、一番泣き出したいのもママのはずなのに、ママは泣いていなかった。

人間ってなんて強いんだろう。こうなったら、もうぼくにもこわいものはない。どっちにしろ、ここが「切りかぶ公園」になってしまえば、ぼくだって死んじゃうんだ。



そうなんだ。ぼくは神さまとヨウセイとの約束をやぶることに心を決めたんだ。カエルになってしまって、カホ先生やママに会えなくなったとしても、ママが悲しんでいるよりはいい。

「一、一のね。」

心の中でぼくはマホーのジユモンをつぶやいた。やがて頭あたまの中がグルグルまわりだし、目の前がまっくらになり、耳も聞こえなくなってきた。

神さまがぼくを何かに変えようとしている。このままぼくは一体、何になってしまっただろう。

神さまがやさしい神さまならいいな。いじわるな神さまだったら、ぜったいぼくはカエルにされてしまっただ。そんなことを思ったのが、ヨウセイとしてのぼくのさいごだった。

それからしばらくして、ぼくは目がさめた。

ぼくの命いのちをかけたマホーはいったいどうなったんだろうか。

そっと目を開けてみると、目の前に人間のママの顔があった。その横にはおねーちゃん。そしてパパもちゃんという。

やった。ぼくのマホーは大成だいせい功こうだったんだ。だって、ぼくの本当のママだったさくらの木の枝は、ちゃんとポツキリ折れているんだから。

ところで、ぼくは神さまによって何に変えられてしまったんだろう。

みんなの様子を見ると、カエルにはならないでいられたみたいだけど。

「ケンちゃん、よかった。気がついたのね。」

今、ママなんて言ったの。ケンちゃん。そうか、犬にでもなったのかな。

なにしろヨウセイだったころのぼくの話は、人間たちには思い出せないはずなんだ。

「ケンタ、パパのことが心配だったんだね。でもほら、この通りパパはどこにもケガしていないよ。」

うーん。これはどういふことなんだろう。

よく見るとぼくには人間そっくりの手がある。足だってちゃんとクツをはいているし、服だってちゃんと着ている。

「パパ、死んでなかったんだね。」



ほら、ちゃんと人間の言葉を話しているし。  
そうか。わかったぞ。  
もしかすると、ぼくはヨウセイから人間に変えられちゃったんじゃないか。  
ぼくたちヨウセイから見れば、人間だって動物の一つだからね。神さまは、人を生き返らせたバツとして、ぼくを人間に変えたんだ。

あとで知ったことなんだけど、この公園のさくらが切りたおされるってのは、  
うわさだけだったみたいなんだ。

っていうか、人間の世界ではうわさだったことになっているみたい。

もちろん、ぼくが使ったマホーはパパを生きかえらせることだけだったから、  
ちょっとだけ神さまがオマケしてくれたんだと思う。

でも、これからはパツペレ・ケツケレ・アツパツパーじゃなくて、人間として  
生きていけなくっちゃいけないって、ちょっと大変だな。

だってマホーが使えないんだから。

## 虹の海の童話集

パップルさまの大マホー

ご意見は、Web版「虹の海の童話集」  
<http://www.mars.dti.ne.jp/gec/fairy>  
またはE-Mail  
[gec@mars.dti.ne.jp](mailto:gec@mars.dti.ne.jp)  
まで